
甘い思いを胸に抱いて

神無月 あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い思いを胸に抱いて

【Zコード】

N71980

【作者名】

神無月 あき

【あらすじ】

ある秋の日。

少女『深水えりか』は今にも心臓が飛び出さんばかりの気持ちでそこについた。

彼の人が来るのを今や遅しと待ちわびて。

木枯らしがわたしを追い抜いていく。

木の葉が舞い踊り、風が冬の近づきを報せている街。そんな中で、マフラーを口元が隠れるように巻いてわたしは一人、学校からの帰り道を歩いてくる。

今日! じゃまつ!

心の中で意氣込むとわたしは右手で小さなガツツポーズを作った。

わたし『深水えりか』は今、女の子だったら誰しも経験するだろ、あの甘酸っぱく、胸が恋焦がれる状況にやきもきしているのです。

そもそもその発端は夏も終わり、風も冷たくなってきた十月初めの放課後のこと。友人の舞と一緒にウインドウショッピングを楽しんだ帰り、住宅街で歩きながら他愛も無いおしゃべりをしていた時だつた。ふと前方に目をやると、わたし達と同じようにしゃべりながら歩いてくる一人組みの男子高校生が目に入った。制服がウチの学校のものと同じだったから、ウチの生徒だってこともわかつたんだけど、その男子学生とすれ違う瞬間、わたしは向かって右側の男子に目が釘付けになってしまったのだ。

その時ほど胸が一つの「こと」でこっぱりになつたことは無かつたんじゃないかしら?

その日の夜からわたしはお風呂に入ってる時も、箸を動かしてると時もその事が頭をチラついて、朝起きてからも、学校に行って授業を受けてる時なんか特にわたしの頭を離れることは無かつた。気付いたら青空に浮かぶ白い雲に目がいっていた。

そして昨日、わたしはこのもやもやを解決すべく、意を決したのだ！

あの人を通る道、そしてその時間、全てを入念に調査して、わたしは放課後の夕焼けが眩しい中であの人があるのを待っていた。もうその間の心臓の高鳴りは苦しいような嬉しいような、なんとも言えない緊張感がわたしを取り巻いていた。

五分、十分、三十分、一時間、もしかしたらそれ以上緊張していた時間は続いていたかもしれない。そしてそれは本当にそれだけの時間が過ぎたのか分からない。実際はもっとうんと短い時間だったかもしれない。その時のわたしに時間の感覚はなかつたと思う。

そして、その時はやつてきた。

あの人の中が聞こえてきたのだ。

さあ、行けわたし！勇気を出すのだ！

自分で自分を打ち震わせて、声をかける準備をする。

最初に声をかけるのは「こんにつけば」。これが大事！

だんだんと声が大きくなつていいく。

そして、わたしが待っている路地と交差している道から、その人が現れた。

わたしのその時の胸の高鳴りは、あまりにも大きくて耳が痛い程だった。

だった。

わたしはそんな中で、一步を踏み出す。

だけど、それが精一杯だった。

恥ずかしさがわたしに魔法をかけたみたいに完全に体が止まってしまった。

目の前を通り過ぎて行く人の人。

は、はううう…………。

その後、家へ帰つてからの後悔と言つたら言葉では言い表せないほどだった。自分を責めまくつて、ベッドの上でゴロゴロして、あまりの情けなさにつづくすら涙まで浮かんだ。

もうそんなのは嫌！

だから今日の決意は一段と固い。

人影もまばらになつてきた住宅街まで来るとわたしは足を止めた。昨日立つてゐるだけで何も出来なかつたあの場所だ。

また胸のドキドキが強くなつてくる。

わたしは右手の平を心臓の辺りに置くと、大きく深呼吸して自分を落ち着かせようとした。

大丈夫！昨日のわたしはもう死んだ！ 生まれ変わったわたしは臆病なんかじゃない！！

そう自分に言い聞かせた、その時だつた。

遠くでのひとの声が聞こえたのだ。

きたつ！！

瞬間、心臓が飛び上がるような感じに襲われる。

ダメっ！恥ずかしさに勝つの！

再度、深い深呼吸をしてあの人があるだろつ、その路地を凝視する。

だんだんと近づいてくるあの人声。それと同じように胸の高鳴りもやつぱり強くなつていつた。

恥ずかしがることなんてない！これは普通の事！それに今は「こに誰もいない！こんなチャンス逃せない！」

あの人声はもうすぐそこだった。

そして、路地からその人は姿を見せた。

今よわたし！声をかけるのつ――

「あ、あのっ……」「んこちわつ……」

石焼きいも 一つぐください!

—毎度あります！

威勢のいい石焼きいも屋さんのおじさんはそう言つと、引いていたリアカーからサービスしてくれたのか、一際大きい焼きいもを新聞紙に包んでくれた。

そして、その焼きいもを渡されると、暖かさも相まって達成感は一際大きかった。

やつた！ついに手に入れたっ！あの男子が歩きながら食べてた焼きいもを見てからもう食べたくて食べたくて！でも、女の子が焼きいも食べるなんて思われたら恥ずかしくて中々買いに行けなかつたんだけど、本当にやつたわ！やつと食べられる～～！！

わたしは逸る気持ちを抑えきれずに、夕焼けが眩しい中、ほくほくの石焼きいもを頬張つて帰路についたのだった。

「也哉亦然哉~~~~~...也~~~~~...也~~~~~...也~~~~~...」

おしま
い

(後書き)

2005年
2010年 作
加筆・修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7198o/>

甘い思いを胸に抱いて

2010年11月5日03時44分発行